

共同研究「宮座と社会…その歴史と構造」の概要

上野和男

共同研究「宮座と社会…その歴史と構造」を中心とした国立歴史民俗博物館の研究事業は、二〇〇三年から二〇〇六年にいたる三年間を中心としておこなわれた。これまで国立歴史民俗博物館では、宮座研究を含む共同研究などはかなりあったが、宮座研究に本格的に取り組んだのはこれがはじめてであった。今回の宮座関係の研究事業は、共同研究「宮座と社会…その歴史と構造」、文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」、宮座情報データベース、民俗文化財映像資料「久井稲生神社の御当」の四事業からなっている。

1. 共同研究「宮座と社会…その歴史と構造」(二〇〇三―二〇〇五)

(1) 研究目的

本研究は、これまでの各分野における宮座研究の成果をふまえながら、現段階において宮座と社会との関連を明らかにしようとする総合的な研究である。

本研究は、主に次の三つの部分から構成される。第一は、宮座と社会についての理論的な検討である。これまでの宮座研究によって宮座と地

域社会構造の関連が明らかにされてきたが、宮座の概念や、家族親族組織との関連など残された課題も多い。これらについて現在の宮座研究を担う研究者で議論を進める。その際、これまでの宮座理論のモデルとなってきた近畿地方の宮座のみならず広く他地域の宮座を含めて検討する。第二は、宮座の現在の状況について広範な地域の調査を実施し、現代の宮座の特質を明らかにすることである。中世に成立した宮座はこれまでも大きな変化を遂げてきたが、現在の宮座も大きな変貌のさなかであり、その実態を現地調査によって解明する。第三は、各種の宮座情報のデータベースの構築である。その中心は、本館がマイクロ資料として所蔵している『肥後和男宮座調査資料』のデータベース化である。

なお、本研究に関連して、平成一五年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」を得ている。

(2) 研究経緯

共同研究会報告・調査

〈二〇〇三年度〉

◇第1回研究会 六月七日（土）・七日（日）、於…国立歴史民俗博物館

八木 透 「丹波と播磨の当屋祭祀」

上野 和男 「宮座研究の課題―国東半島の宮座を事例として―」

今後の研究計画に関する討議

◇第2回研究会 一〇月二二日(日)・一三日(月)、於…滋賀県野洲町

中央公民館、御上神社

橋本 章 「宮座の外形について」

藪部 寿樹 「名主座における村落内身分の研究」

上野 和男 「御上神社の宮座組織と儀礼」

御上神社芋茎まつりの調査、野洲町歴史民俗資料館の見学

◇第3回研究会 一二月一三日(土)・一四日(日)、於…国立歴史民俗

博物館

坂田 聡 「中世後期―近世前期における宮座の構造と村落類型―

丹波国山国地域の宮座・同族組織・家格制の考察を中心

に―」

政岡 伸洋 「宮座の事例から民俗学は何を学ぶべきか―民俗として

の宮座に対する新たな理解に向けての予備的考察―」

宮座文献目録データベースの構築に関する討議

◇第4回研究会 二月二八(土)～三月二日(火)、於…亀岡市立図書

館

真野 純子 「祭りに表出した社会構造と伝承性―近江御上神社の場

合―」

大野 啓 「祭祀権と格―口丹波の二、三の事例より―」

斉藤 利彦 「村と芸能―京都府福知山市北部地域の農村歌舞伎を中

心に―」

亀岡市・日吉町・三和町・篠山市の宮座調査、日吉町郷土資料館の見学、

今年度研究会のとりまとめ

〈二〇〇四年度〉

◇第5回研究会 二〇〇四年五月二九日・三〇日、於…国立歴史民俗博

物館

安室 知 「宮座と共同漁労」

森本 一彦 「社会関係からみた宮座」

市川 秀之 「山口県防府の宮座」

岡山県志呂神社の宮座行事についてのビデオ映写とその検討

◇第6回研究会 二〇〇四年一〇月一六日―二〇日、於…大分県立歴史

博物館、白鬚田原神社、岡山県志呂神社

段上 達雄 「東九州のジガンとジガン座」

菅野 剛宏 (大分県立歴史博物館)「国東半島の祭祀組織について」

上野 和男 「白鬚田原神社の宮座組織とその儀礼」

大分県立歴史博物館の展示見学、白鬚田原神社のどぶろく祭の調査

神原英朗 (前岡山県建部町教育委員会)「志呂神社京尾御供につい

て」

志呂神社秋祭の調査。

◇第7回研究会 二〇〇五年一月八日―九日、於…国立歴史民俗博物館

小栗栖健治 「近代における宮座の変容」

崔 杉昌 「宮座の変容と再編―岡山県阿哲郡神郷町高瀬の事例よ

り―」

藪部 寿樹 「美作国弓削荘における名主座について」

◇第8回研究会 二〇〇五年二月一日―三日、於…長浜城歴史博物

館、山東町志賀谷公民館

橋本 章 「近江湖北オコナイ研究の成立と展開」

太田 浩司 「湖北オコナイと宮座」

山東町志賀谷のオコナイの調査

〈二〇〇五年度〉

◇第9回研究会 二〇〇五年五月一四日―一五日、於：国立歴史民俗博物館

上野 和男 「久井稲生神社の宮座祭祀―概要報告―」

小笠原尚宏 「久井稲生神社『御当座』の祭事概要」

藪部 寿樹 「久井稲生神社文書調査について（中間報告）」

市川 秀之 「滋賀県米原市志賀谷のおこないについて」

段上 達雄 「志賀谷のオコナイ資料について」

藪部 寿樹 「近世宮座における輪番神主と専任神主―大和国大安寺村宮座記録から―」

浦西 勉 「奈良県布留郷の宮座の二・三の問題について」

◇第10回研究会 二〇〇五年七月五日―七日 於：秋田経済法科大学、

東湖八幡神社

稲 雄次 「東湖八幡神社統人行事について」

関口 健 「篔岳山篔峰寺白山祭」

東湖八幡神社祭礼調査

◇第11回研究会 二〇〇五年一〇月四日―五日 於：杜町中央図書館

埴岡 真弓 「莊園鎮守社における宮座の諸相―揖保郡新宮町の事例

をとおして―」

久下 隆史 「上鴨川住吉神社の宮座と芸能」

上鴨川住吉神社祭礼の調査

◇第12回研究会 二〇〇五年一二月一〇日―一一日 於：国立歴史民俗

博物館

真野 純子 「若狭海山の神社祭祀と宇波西神社―宇波西神事を素材

にして―」

橋本 章 「〈宮座〉と〈オコナイ〉―宮座概念の混用が招いたもの―」

森本 一彦・崔 杉昌 「岡山県新見市の神社祭祀の事例報告」

崔 杉昌 「三鉢妙見宮の祭祀組織と儀礼」

小沢輝見子 「宮座をもつ祭の現在―東近江市妹の春日神社の祭礼よ

り―」

市川 秀之 「肥後和男宮座論の再検討」

◇第13回研究会 二〇〇六年三月四日―五日 於：国立歴史民俗博物館

福田アジオ 「宮座とは何か―その概念と類型化について―」

八木 透 「祭祀・トウヤ・長老―祭祀母体―研究の展望と課題―」

上野 和男 「宮座研究の歴史と現在―概念・当屋制・変化―」

全体討論「宮座概念と今後の宮座研究」

主な議論

共同研究会での議論の要点を列記すれば、以下のとおりである。

①宮座の概念―「外面的規定」から「内面的規定」へ、家と個人の二

重性、当屋制

②中国九州の宮座の構造と当屋制の類型―「家当屋制」と「組当屋制」

〈中国地方の宮座の特徴〉

・固有名詞をもつ「名」ないし「名」に類似する社会組織を基盤として

いること

・名の中で特定の「名」が優越した地位を持つこと

・「名」によって神前の着座位置が固定している例が多いこと

・神官・社家などは別に座を構成する例が多いこと

・名主―寄子関係が認められること

・当屋制を規定する原則として年齢的要素が見られないこと

・最近、座の権利の譲渡、売買がみられること

③宮座の現代的変化

・「株座」の変化―「村座」化。権利の譲渡、売買。「権利感覚」から「義務感覚」へ。

- ・祭祀経費の調達法の変化
- ・祭祀執行の変化——「当屋」祭祀から会所・公民館祭祀へ
- ・対等観念の浸透

(3) 研究成果

〈二〇〇三年度〉

この共同研究の課題として設定した「新たな宮座論」の構築について、多くの共同研究員が同じような問題意識をもっていたことを共同研究会の議論を通じて確認し得たことは、この共同研究の方向性に関連して重要性を持つと考える。とくに、共同研究員が近畿地方以外の宮座についても高い関心を持つことを確認できたのは大きな成果であった。

共同研究会のうち、第1回の研究会では共同研究全体の目的について議論し、近畿地方以外の宮座（とくに中国地方、九州地方）の宮座を重視しながら、宮座のあらたな全体像を構築することを確認した。研究会における報告はこれまでの共同研究員が進めてきた宮座研究の成果を報告した。ここでも新たな宮座論について、多くの共同研究員が高い関心を持つていることを確認できた。このうちのひとつは、原稿にまとめて『国立歴史民俗博物館研究報告』に投稿できたのは大きな成果であった。

二回の研究会は現地調査を兼ねて実施し、滋賀県野洲町の御上神社の秋祭と京都府亀岡市周辺の宮座の現状について調査した。とくに御上神社の宮座は現在、急激な変動をとげつつあることを確認できた。また、科学研究費補助金を使って共同研究員各自による各地の宮座調査を開始した。その多くは次年度以降も調査が継続される予定である。今年度は、調査地の選定と宮座の現状の確認に力点を置いた。

宮座情報データベースの準備のひとつとして、「宮座研究文献目録データベース」の文献データの収集をほぼ終了した。収集した文献データは約一、五〇〇件にのぼった。平成一六年度はこれを国立歴史民俗博物館

の公開データベースとして公開できるまでの段階になった。

平成一五年度の研究の自己評価は以下の通りである。この共同研究の課題として設定した「新たな宮座論」の構築について、多くの共同研究員が同じような問題意識をもっていたことを共同研究会の議論を通じて確認し得たことは、この共同研究の方向性に関連して重要性を持つと考える。とくに、共同研究員が近畿地方以外の宮座についても高い関心を持つことを確認できたのは成果であった。

宮座の現状を確認しようとする現地調査も科学研究費補助金の交付を受けたので、順調に開始することができた。また、宮座データベースのうち、宮座研究文献目録データベースについては、データ収集の作業をほぼ終了することができた。

共同研究の第一年度としては、次年度以降に展開する研究の基礎を確立しえたと評価している。

〈二〇〇四年度〉

この共同研究は、これまで近畿地方の宮座を基礎として構築された宮座論から脱却し、近畿地方以外の宮座の本格的な現地調査を踏まえて、新たな宮座論を構築するのが目的であるが、今年度もこの目的にしたがって現地調査を行うとともに、中国地方・九州地方の宮座の特徴についての検討を行った。

まず、中国地方・九州地方の宮座の現地調査として、大分県国東半島の大田村白鬚田原神社の宮座およびその祭礼の調査、岡山県建部町の志呂神社の宮座祭礼の調査を共同で実施するとともに、広島県久井町の久井稻生神社の文書調査、撮影、祭礼調査を実施した。これらは何れも名もしくは神官組をベースとする当屋制を特徴としており、直接的に家をベースとしている近畿地方の当屋制とは異なる当屋制を基礎とする宮座である。また、これらの中世的と考えられる宮座組織が、現在、激しく

変貌しつつある実態が明らかになった。第5回、および第7回の研究会において、中国・九州の宮座の理論的検討を試み、その共通する特徴を以下のように、ほぼ確定することができた。名ないし名に類似する社会組織を基盤としていること、名には固有名詞が付与されている例が多いこと、名の中で特定の名が優越した地位を持つこと、名によって神前の着座位置が固定している例が多いこと、神官・社家は別に座を構成する例が多いこと、当屋制を規定する原則として年齢的要素が見られないこと、最近、宮座組織の変容が著しいこと。中国・九州の宮座について、このように一定の見通しが得られたことは、今年度の共同研究の大きな成果であった。

このほかに第8回研究会では、滋賀県湖北地域のオコナイについて調査を実施した。オコナイは宮座論に微妙にからむ祭礼行事であるが、宮座の視点からオコナイをどのようにとらえられるかについて、本格的に検討した。

宮座情報データベースの準備のひとつとして、「宮座研究文献目録データベース」の文献データの補充を実施するとともに、これを国立歴史民俗博物館の公開データベースとして公開する準備を進めた。

〈二〇〇五年度〉

共同研究会は今年度五回実施した。報告の中心は、これまで〇年間に共同研究員が現地調査を実施した各地の宮座であるが、この共同研究の主眼であった近畿地方以外の宮座の報告は中心となった。これまでの報告から、宮座の構造は、近畿地方の宮座、兵庫県以西の中国地方、九州地方の宮座、および関東・東北地方の宮座に区分できる見通しが得られたのは大きな成果であった。第5回研究会では、近畿地方以外の宮座についての広範な調査を踏まえて、現段階における宮座の概念について総合的な検討を行った。

今年度は、東湖八幡神社（秋田県湯上市）、上鴨川住吉神社（兵庫県）の宮座について共同の現地調査を実施することができた。とくに、東湖八幡神社の統人行事は、当屋制にもとづいて祭祀が行われており、東北地方における宮座を考察する上で重要な事例資料を収集することができた。このほかにも科学研究費補助金を使って、久井稲生神社の御当行事（広島県）、若狭宇波西神社の宮座（福井県）等の調査も実施した。

この共同研究は、最近沈滞化しつつある宮座研究を活性化するための新たな基礎を構築することに目的があったが、宮座概念の再検討、近畿地方以外の宮座の集中的調査および「宮座文献データベース」の構築などの成果を挙げることができた、この共同研究を開始以来、宮座研究は再び活発になりつつあり、数冊の学術書も刊行されるようになり、宮座研究の再活性化の目標は実現しつつあるといえる。しかしながら、三年間という時間は宮座研究にとってはあまりにも短く、理論的検討においても、また現地調査においても課題が多く残されており、今後も歴博の共同研究として、全国の研究者を結集して研究に取り組むことは必要であると考えられる。

（4）組織（共同研究実施時）

共同研究員

- | | | |
|-------|-----------------------|-------|
| *八木 透 | 佛敎大学文学部・教授・民俗学 | 研究代表者 |
| 坂田 聡 | 中央大学文学部・教授・中世史 | |
| 藪部 寿樹 | 山形県立女子短期大学・教授・中世史 | |
| 小栗栖健治 | 兵庫県立歴史博物館・館長補佐・歴史民俗学 | |
| 福田アジオ | 神奈川大学外国語学部・教授・民俗学、歴史学 | |
| 浦西 勉 | 奈良県立民俗博物館・主任学芸員・歴史民俗学 | |
| 市川 秀之 | 大阪狭山市教育委員会・学芸員・民俗学 | |
| 政岡 伸洋 | 東北学院大学文学部・助教授・民俗学 | |

橋本 章 長浜市史編纂室・学芸員・民俗学

齋藤 利彦 佛敎大学文学部・講師・民俗学、芸能史

森本 一彦 京都文教女子高校・講師・民俗学

段上 達雄 別府大学文学部・教授・宗教民俗学

上野 和男 国立歴史民俗博物館・教授・社会人類学

稲 雄次 秋田経済法科大学法学部・教授・日本政治思想史

真野 純子 学識経験者・近世史

安室 知 国立歴史民俗博物館・助教授・民俗学

青木 隆浩 国立歴史民俗博物館・助手・民俗学

招待報告者

大野 啓 佛敎大学・大学院生・民俗学

菅野 剛宏 大分県立歴史博物館・学芸員・民俗学

神原 英明 岡山県建部町教育委員会

崔 杉昌 佛敎大学・大学院生・民俗学

太田 浩司 長浜城歴史博物館・学芸員・中世史

小笠原尚宏 総合研究大学院大学・日本歴史専攻大学院生・社会学

関口 健 国立歴史民俗博物館・外来研究員・宗教史

埴岡 真弓 学識経験者・中世史

久下 隆史 学識経験者・民俗学

小澤輝見子 佛敎大学・大学院生・民俗学

2. 科学研究費補助金・基盤研究A(1)「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」(二〇〇三―二〇〇五年度)

(1) 研究目的

中世に成立した神社祭祀組織としての宮座は、現在、大きな変貌のさなかにある。宮座は当屋制を原理とする神社祭祀組織であり、神事当番

や神主を交代で勤める当屋を設定し、当屋を中心に祭祀を行なう組織であるが、これまでも歴史的にいくつかの大きな変化を経験してきた。ひとつは、藩制村と家制度の成立に伴う中世から近世にかけての変化であり、この時期に、村落連合的な宮座から村落単位の宮座に変化するとともに、個人単位の宮座から家を単位とする宮座に変化した。いまひとつは、明治以降における株座から村座への変化、すなわち、村落の上層が祭祀を独占する形態から、全戸による対等的な祭祀への変化である。さらに現代では、村座化がいつそう急激に進行するとともに、宮座組織や儀礼・芸能も激しく変化しつつある。なかには、宮座そのものが消滅して一般的な神社祭祀形態に変化した例もしばしばみられる。このような激しく変化しつつある現代の宮座を広範な地域について、体系的に調査し、現代における宮座の変動を明らかにするとともに、宮座に関するデータベースを構築した研究はこれまでになかった。この意味において、現代の宮座の体系的な調査研究は、人類学、民俗学、歴史学などの宮座研究の緊急の課題である。

本研究は、これまでの各分野における宮座研究の成果をふまえながら、現代の宮座に注目し、宮座の今日的情況について広範な調査を実施し、現代の宮座の総合的な構造を明らかにするとともに、それをもとにしてデータベースを作成する一つの試みである。

本研究で試みる研究は、つぎの二つである。ひとつは、現代の宮座の体系的な調査研究である。この調査においては、広範な地域の宮座を多角的に調査する。これまでの宮座の研究は、近畿地方を中心に行なわれてきたが、本研究では近畿地方以外の関東、中部、中国・四国、九州の宮座についても調査を実施し、近畿地方の宮座と比較しながら、全体として宮座の構造とその変化を明らかにしたい。また調査にあたっては、組織、儀礼、芸能の三つの視点から多角的に調査し、宮座の歴史展開にも注目する。また、近畿地方の宮座については、昭和初期に宮座の総

合的な調査を実施した歴史民俗学者・肥後和男が残した「肥後和男宮座調査資料」(国立歴史民俗博物館マイクロ・フィルム資料)を基礎として実施し、昭和初期以降の変化を詳細に追跡調査する。いまひとつは、宮座データベースの作成である。宮座データベースはつぎの三つの部分からなる。第一は、本研究の調査にもとづく現代の宮座のデータベースである。このデータベースでは、過去の調査データがある宮座については、過去のデータも加えて、変化が明らかになるように作成する。第二は、「肥後和男宮座調査資料」のデータベース化である。この資料は、これまで宮座研究者に公開されなかったが、本研究においてデータベースとして公開したい。第三は、宮座研究の論文データベースである。このデータベースには、宮座研究の中核部分をなす人類学、民俗学、歴史学以外の分野の研究、すなわち、宗教学、社会学、芸能史などの論文も含める。現在、宮座研究はやや停滞しているといえる。宮座の本質の解明が一段落したことが大きな要因と考えられる。しかしながら、宮座の変化については多くの課題が残されている。今後の宮座研究の展開のためには、宮座研究者の共通財産となりうる現代の宮座の体系的な調査と、宮座データベースの構築が緊急に求められている。この意味において、本研究は、今後の宮座研究の展開のためのあらたな重要な基礎を提供し得る研究である。

(2) 調査

本研究では、現代の宮座の変化についての現地調査、文書資料調査、宮座データベースの構築を中心に研究活動を行った。このうち、本研究で実施した主な調査は以下のとおりである。

共同調査

御上神社芋茎まつりの調査(滋賀県)

亀岡市・日吉町・三和町・篠山市の宮座調査(京都府)

白鬚田原神社のどぶろく祭の調査(大分県)

志呂神社秋祭の調査(岡山県)

山東町滋賀谷のオコナイの調査(滋賀県)

東湖八坂神社祭礼調査(秋田県)

上鴨川住吉神社祭礼の調査(兵庫県)

久井稲生神社の御当行事調査(広島県)

妹春日神社の宮座調査(滋賀県)

個別調査

秋田県潟上市の東湖八幡神社の統人行事の調査

福井県三方上中郡若狭町の宇波西神社の宮座調査

滋賀県野洲郡野洲町の御上神社の宮座および秋祭の調査

滋賀県北部地域のオコナイの調査(米原市ほか)

滋賀県東近江市妹の春日神社の宮座儀礼調査

岡山県新見市の宮座調査

広島県久井稲生神社の宮座、および宮座関係文書の調査

山口県防府市における宮座調査

(3) 文書調査・撮影

宮座関係文書の資料化として、以下の文書の撮影、CD化および紙焼き本の制作を行った。

聖心女子大学所蔵宮座文書

滋賀県日野町熊野の宮座文書

貴志・山田区有宮座文書(兵庫県)

新宮町宮座文書(兵庫県)

志呂神社文書(岡山県)

久井稲生神社文書調査(広島県三原市久井町)

山科家文書(広島県三原市久井町)

小田家・八田家文書（広島県廿日市市）

（4）宮座情報データベース

森本一彦氏が作成した宮座論文データベースをもとに、研究メンバーで補充作業を行い、その成果を、森本一彦編『宮座文献目録二〇〇三年度版』（科学研究費補助金・基盤研究A「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」調査報告書1）として刊行した。

（5）研究成果

この研究は、最近沈滞化しつつある宮座研究を活性化するための新たな基礎を構築することに目的があったが、総論的にいえば、宮座概念の再検討、近畿地方以外の宮座の集中的調査および「宮座文献データベース」の構築などの成果を挙げることができた、この共同研究を開始以来、宮座研究は再び活発になりつつあり、数冊の学術書も刊行されるようになり、宮座研究の再活性化の目標は実現しつつあるといえる。

中国地方・九州地方の宮座については、現地調査として、大分県国東半島の大田村白鬚田原神社の宮座およびその祭礼の調査、岡山県建部町の志呂神社の宮座祭礼の調査を共同で実施するとともに、広島県久井町の久井稻生神社の文書調査、撮影、祭礼調査を実施した。これらは何れも「名」、もしくは神官組をベースとする当屋制を特徴としており、直接的に家をベースとしている近畿地方の当屋制とはことなる当屋制を基礎とする宮座である。また、これらの中世的と考えられる宮座組織が、現在、激しく変貌しつつある実態が明らかになった。

中国・九州の宮座の特徴を以下のように、ほぼ確定することができた。名ないし名に類似する社会組織を基盤としていること、名の中で特定の「名」が優越した地位を持つこと、「名」によって神前の着座位置が固定している例が多いこと、神官・社家は別に座を構成する例が多いこと、

当屋制を規定する原則として年齢的要素が見られないこと。

『宮座文献目録二〇〇三年度版』と「宮座研究データベース」の構築―
―「宮座研究データベース」を完成させ、国立歴史民俗博物館の公開データベースのひとつとして公開する準備を整えた。

（6）研究組織

研究代表者・研究分担者

*上野 和男 国立歴史民俗博物館教授、研究代表者

宮家 準 国学院大学神道文化学部教授

福田アジオ 神奈川大学外国語学部教授

松尾 恒一 国立歴史民俗博物館助教授

蘭部 寿樹 山形県立米沢女子短期大学教授

八木 透 佛教大学文学部教授

政岡 伸洋 東北学院大学文学部助教授

段上 達雄 別府大学文学部教授

笹原 亮二 国立民族学博物館助教授

安室 知 国立歴史民俗博物館助教授

青木 隆浩 国立歴史民俗博物館助手

研究協力者

市川 秀之 大阪狭山市教育委員会・民俗学

小栗栖健治 兵庫県立歴史博物館・歴史民俗学

坂田 聡 中央大学文学部・中世史

真野 純子 学識経験者・近世史

橋本 章 長浜市史編纂室・民俗学

森本 一彦 京都文教女子高校・民俗学

埴岡 真弓 学識経験者・中世史

宇野 功一 科学研究費研究員

小笠原尚宏 総合研究大学院大学日本歴史研究専攻院生

(7) 成果報告書の刊行

宮座の現地調査、文書調査、宮座データベースの構築を中心とする、科学研究費補助金・基盤研究A(1)「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」の成果報告書は、二〇〇六年三月に次のような内容で刊行した。

- 稲 雄次 東湖八坂神社祭統人行事
- 真野 純子 若狭海山の宇波西神事と宇波西神社の祭礼―平成一七年(二〇〇五)の観察記録から―
- 橋本 章 湖北のオコナイと宮座―滋賀県木ノ本町杉野の事例から―
- 市川 秀之 滋賀県米原市志賀谷におけるオコナイ行事の変容と村落社会
- 段上 達雄 志賀谷華の頭の絵画資料
- 八木 透 東近江の宮座と当屋制―ミヤノトウとカンヌシをめぐる事例報告―
- 小笠原尚宏 長老衆と祭祀組織―滋賀県野洲市須原の苗田神社の事例報告―
- 森本 一彦 座講の開放性と閉鎖性―和歌山県橋本市の事例―
- 小栗栖健治 摂津国北部地域(三田市)の宮座資料
- 埴岡 真弓 たつの市新宮町域の宮座資料について
- 崔 杉昌 新見市の宮座の構成と特徴
- 上野 和男 久井稲生神社の宮座組織
- 齊藤 利彦 京都府福知山市北部地域の村落社会と芸能関係資料集
- 蘭部 寿樹 美作国弓削荘名主座関係文書
- 蘭部 寿樹 聖心女子大学文学部所蔵文書

蘭部 寿樹 備後国久井稲生神社名主座関係文書

蘭部 寿樹 安芸国久島郷小田家文書

〈資料〉

- 1 美作国弓削荘名主座関係文書
- 2 聖心女子大学文学部所蔵文書
- 3 備後国久井稲生神社名主座関係文書
- 4 久井稲生神社文書目録
- 5 森本一彦編『宮座文献目録二〇〇三年版』

3. 宮座研究論文データベースの構築・公開

このデータベースは、昭和初期から開始された「宮座」に関する論文・報告を網羅した始めての本格的なデータベースである。「宮座」は当屋制を原理とする神社祭祀組織であるが、宮座についてはこれまで、歴史学、人類学、民俗学、宗教学、社会学をはじめとして広範な分野で研究が進み、調査報告・論文の数は膨大である。しかしながら、これまで宮座関係論文を網羅し、多角的に検索しうるデータベースは構築されたことがなく、せいぜい各専門分野ごとの文献目録にとどまっていた。この「宮座研究論文データベース」は、各分野の宮座研究を網羅し、著者、刊行年、対象地域、論文タイトル、雑誌名などから多角的検索できるように作られたデータベースである。

このデータベースは共同研究「宮座と社会…その歴史と構造」(二〇〇三―二〇〇五年度)および科学研究費補助金による基盤研究(A)「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」(二〇〇三―二〇〇五年度)の成果の一部である。このデータベースははじめ、共同研究員・森本一彦氏によって作成され、共同研究のメンバーによるデータの追加をへて、二〇〇四年度に完成した。その後、国立歴

史民俗博物館の公開データベースとして公開する準備を進め、二〇〇六年四月に公開したものである。

なお、このデータベースの構築に先立って、二〇〇四年三月に、森本一彦編『宮座文献目録二〇〇三年度版』（科学研究費補助金・基盤研究A「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」調査報告書1）として刊行した。

最近の宮座研究の停滞の一因は、膨大な研究を効率的に検索できるデータベースの欠如にあったが、このデータベースによってこの問題は解消したといえる。また、このデータベースは、宮座研究史の追跡と考察にも有力な材料を提供し得る。各分野のわたる総合的な宮座研究史の検討は、これまで試みられていないが、このデータベースによって、その可能性が与えられたと考えられる。これらの意味において、このデータベースは、宮座研究の今後の新たな展開に寄与すると確信する。

4. 民俗文化財映像資料「久井稲生神社の御当」の制作

(1) 趣旨

民俗文化財映像資料は、「民俗研究映像」とともに、国立歴史民俗博物館が制作する民俗映像資料の一つである。民俗研究映像が研究の一手段として、また、研究成果の映像化を目的として制作するのに対して、民俗文化財映像資料は民俗文化財の記録保存を目的としている。民俗文化財映像資料は、文化庁の協力のもとに、全国各地に伝承されている生活技術、社会組織、民間信仰、祭礼、民俗芸能などの現状を記録した映像である。基本的にこの映像資料は、文化庁が選択した「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」（一九九九年八月一日現在、四九七件）の中から、緊急に記録する必要性の高い素材を選択して作成する。二〇〇一年春に文化庁と国立歴史民俗博物館との協議が行われ、

二〇〇一年から五年間の制作計画が立案されており、本年度の映像「久井稲生神社の御当」は五年計画の最終作品として制作されたものである。また、これまでこの映像資料制作は、単年度制作であったが、さらに作品の水準を向上させるために、二〇〇一年度からは二年度にわたって制作することとなった。第一年目に製作会社とともに事前調査を実施し、実際に撮影対象の祭礼・行事などを調査した上で、二年目に制作することとした。

民俗文化財映像資料は国立歴史民俗博物館と文化庁が協議して対象を選択し、各映画会社から提案されたシノップシスを検討して製作会社を選定し、選定された映画会社が製作を行う。本映像は一六ミリフィルムで撮影し、最終的な作品も一六ミリで製作する。完成作品のほか、撮影全ラッシュも資料として国立歴史民俗博物館で保存する。民俗文化財映像資料として制作された作品は、これまでも数々の賞を受賞し、製作方法も含めて記録映画界で高い評価を得ている。作品は撮影現地や館内での試写会で公開しているほか、国立歴史民俗博物館展示場のビデオボックスで常時公開している。また、制作会社が一般に頒布している。なお、民俗文化財映像資料の著作権は、国立歴史民俗博物館が保有している。

(2) 二〇〇五年度制作映像「久井稲生神社の御当」

二〇〇五年度の民俗文化財映像資料の制作対象として選択したのは、「久井稲生神社の御当」である。宮座を主題とする民俗文化財映像資料の制作は、大分県西国東郡大田村上沓掛と永松の宮座を対象とした「国東の神まつり」（二〇〇〇年度制作）に続いて二作目である。久井稲生神社の御当行事は、一九八一年に文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択されたが、これまでに本格的な記録作成や映像資料作成はこなわれていない。この行事は久井稲生神社の宮座によって毎年一〇月に行われる祭礼であり、奉納した鯛を座のなかで料

理し、座員に分配するのが儀礼の中心である。このことから、この御当行事は「場の魚」ともよばれてきた。この御当行事で注目されるのは、その基盤となる宮座組織である。久井稲生神社の宮座は、かつての杭荘の領域内の村落の氏子を範囲として、中世的な「名」を基盤として構成されている。一般的に十軒前後で構成される名の有力家が、名を代表して宮座のメンバーとなる。宮座は、九六軒で構成され、東座、西座の二座に等しい家数で分かれる。このほかに宮司、社家などの座として見子座がある。しかしながら、こうした中世的な宮座も現在、激しく変貌しつつある。過疎化、脱農化などの社会変化にともなって、宮座の座の権利が売買され、宮座構成員の交替が著しく、また、祭礼参加者が激減しつつある。こうした現状を映像記録として作成するのが、今回の久井稲生神社の御当行事の映像制作の目的である。

第1回民俗文化財映像資料制作委員会は、二〇〇四年六月二十五日に開催し、久井稲生神社の御当行事の制作要項を決定した。委員会に先立ち、二〇〇四年五月一九日―二〇日に現状確認のための現地調査を実施し、制作要項の原案を作成した。決定された制作要項をもとに、七月二日に映画制作会社を対象とする説明会、七月八日に久井稲生神社における現地説明会を実施した後、映画会社にシノップシスの提案を求めた。七社からシノップシスの提案があり、これを八月五日開催の第2回民俗文化財映像制作委員会において審査し、検討のあと、委員全員の投票によって、制作会社を桜映画社に決定した。

久井稲生神社の御当の映像は一〇月に行われる祭礼が中心となるが、その祭礼の予備調査が、民俗文化財映像制作委員会の委員と桜映画社のスタッフによって行われた。この予備調査の結果を踏まえて二〇〇五年二月に桜映画社からシナリオ案が提出され、二〇〇四年度の準備は終了した。

第3回民俗文化財映像資料制作委員会は、二〇〇五年六月二三日に開

催し、昨年度末に佐倉映画社から提出された事前調査報告書を了承するとともに、新たなシナリオ案について検討し、シナリオをほぼ確定した。撮影は一〇月一七日の行事を中心に実施し、これには国立歴史民俗博物館の教員および文化庁関係の委員、外部委員の一部が立ち会った。その後、桜映画社が編集作業を進め、二〇〇六年二月一日開催の第4回民俗文化財映像資料制作委員会で内容について承認し、音入れ作業などを経て三月に完成した。

民俗文化財映像資料「久井稲生神社の御当」は、本編一六ミリフィルム版、三五分の作品である。企画・大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、協力・文化庁、製作・桜映画社。

「久井稲生神社の御当」の主な内容は以下のとおりである。一〇月一七日の御当行事を中心に、その準備過程、および宮座組織の詳細を映像化した。

- 1 久井稲生神社と杭荘
- 2 御当(宮座)の構成
- 3 行事の諸役と祭礼の準備
- 4 御当の当日行事
- 5 古老が語る昔の御当
- 6 御当後の行事

二〇〇三―二〇〇五年度にわたる国立歴史民俗博物館の宮座関係の研究事業は、以上のような経過で実施された。その後、最終的な成果報告書の執筆作業に入り、ここに『国立歴史民俗博物館研究報告』の一冊として刊行する運びとなった。本報告に収録した諸論文は、宮座研究の現代的課題に何らかの回答を出すとともに、今後の宮座研究の展開に貢献するものと確信している。最後に、共同研究をはじめとするこの研究事業にご参加いただいた共同研究員、招待報告者の方々、現地調査、文書

調査、映像製作にご協力をいただいた方々に深く感謝したい。

*各論文文末に記載されている執筆者の所属は、論文投稿時の所属である。

(国立歴史民俗博物館研究部)
